

11月



## あの日のあの川 リレー日記 ～第10話～



あの日のあの川  
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

### 第10話主人公 佐々木 洸

(筑波大学社会・国際学群 国際総合学類4年 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：茨城県小貝川)

### 「私と鴨川」

いつのこと？：小学生～大学生時代

どこの川？：鴨川

「まもなく京都に着きます、14番線到着、お出口は右側です…」

東山の長いトンネルを抜けると、アナウンスとともに車窓には懐かしいあの川の風景が広がっていたー

私は小学校低学年から浪人生時代までを京都市で過ごした。元々の生まれは茨城県であり、小学2年生に進級する春休みに京都市に引っ越してきたのだ。あの日、さまざまな思いを胸に、当時人気車両であった500系新幹線の窓から外の様子を窺っていた私の目に、山に囲まれて広がる街並みと川の風景が飛び込んできた。私が初めて京都の街、そして鴨川を目にした瞬間だった。

京都に住み始めてから中学に入る頃まで、私はたびたび週末、一家で鴨川を散歩した。鴨川の両岸は遊歩道となっていて歩きやすく、大勢の家族連れ、カップル、ランナー、そして大学生などでにぎわっていた。川を渡る飛び石などもあり、子供の散歩コースとしても退屈しなかった。私はよく、出町柳から四条通までに架かる橋の数を数えながら歩いたものだった。

ある日、どこかへ出かけた帰り道、阪急河原町駅に向かって歩いていると、弟が河川敷に落ちていた100円玉を見つけ、拾い上げた。得意げに喜んでいた弟であったが、それをポケットにしまわずずっと大切に握りしめていたのが不幸であった。その後、河川敷から川に向かって小石を投げて遊んでいたとき、弟は小石と一緒に100円玉も鴨川に投げ込んでしまったのである。我々は弟を慰めはしたが、自棄になった弟は皆の馬鹿――！！などと泣き叫んでいた。

いつものように鴨川を歩いていた帰り道、この日は三条大橋近くのスターバックスに立ち寄った。珍しいごちそうであったが、よそ見をしながら歩いていた弟は段差に蹴躓いて転び、手にしていたキャラメルフラペチーノをぶちまけてしまった。この日も弟は泣きながら家まで帰ることになった。あの頃はまだ小さかった弟も、今ではただのおやじになってしまった。小学生の頃、鴨川を散歩した思い出を振り返ると、我々は必ず、あの時の弟の幼い泣き顔を思い出すのである。

中学生になると、家族総出で出かける頻度は減り、鴨川を歩くこともすこし少なくなったのではなかっただろうか。大阪の中学に入学したこともあり、京都より大阪方面に出かけることが多くなった。そんなある日の中学の遠足は、京都府立植物園から北山大橋に向かい、鴨川を四条大橋に向けて歩くというものであった。大阪や兵庫方面の生徒は初めてだったかもしれないが、これは我々がかつて何度も通った散歩ルートであり、私なんかは遠足といっても全然新鮮味が無いななどと思っていた。ちょうど、鴨川を歩くのにも飽きてきた頃であった。

高校生になると、また京都のほうへ足を運ぶことが増えた。いつも大阪へ出かけているからか、時たま京都のほうへ来てみると、一度は飽きてしまった風景も違って見えた。確かに、高校の最寄駅の駅前のごちゃごちゃしていて風俗店なども立ち並び、あまりガラの良い雰囲気ではなかった。鴨川へ来ると、まだ幼かった頃の思い出が蘇り、心のどこかに懐かしさのようなものも感じていたのかもしれない。あるいは、大学では東京に行く決めていたからかもしれない。今のうちに京都を楽しんでおこうと思っていたのだろうか。友達と遊ぶ約束はできるだけ京都でするようになった。

高校卒業後、なぜか私は東京の大学生ではなかった。さらに言えば、大学生ですらなかった。残念ながら、受験戦争に敗れ去ったのであった。私は、予備校は京都に通うことにした。というわけで、京都でもう一年、浪人生としての生活が始まった。予備校には幸いにも高校の仲間が大勢“進学”していた。我々の仲間は毎週日曜日の夕方、予備校の玄関を出るとまっすぐ家へ帰らずに、丸太町通りを鴨川へ向かい、河川敷を四条大橋まで歩いた。試験本番はかなり先のことであったので、必死さはまだあまりなく、あったのは、京都で初めて学生(?)をしている新鮮さであった。歩きながらしていた話の内容は、くだらなすぎて思い出せない。

ある日、いつものように仲間と鴨川を歩いていると、私の携帯電話に一通のメールが届いた。それは小学生の頃、同級生であった S さんからであった。彼女とは小学校卒業以来、一度も会うことができなかった。どうやら彼女も今、同じ予備校に通っているらしい。私は心臓が高鳴るのを感じていた。ところが、狭い予備校なのに中々偶然の出会いには訪れなかった。メールによれば、彼女は度々私を目撃していたようだが、小学生の頃から比べ、背が高くなりすぎて威圧感があり、中々声かけられないという。確かに当時から私の身長は 180 cm を超えていて、教室内の狭い通路ですれ違う際、相手に謝られることが多かった。結局、大学受験を終えて京都を後にするまで、彼女と出会うことはできなかった。

先月、大阪に所用があり、久々に京都を訪れることになった。筑波大学入学後、やはり京都は良かったなどと、もっと京都を味わっておかなかったことを後悔していた私は、友達に会いに、度々京都や大阪へ出かけていたが、この時は二年近く間が空いていた。また京都へ行きたいという気持ちがあったのだろう。用事が済んだら京都に寄って、久しぶりに散歩でもしてみようかな…。そんなことを考えていると、やがて最新型 N700 系新幹線が減速を始めた。

「まもなく京都に着きます、14 番線到着、お出口は右側です…」

東山の長いトンネルを抜けると、アナウンスとともに車窓には懐かしいあの川の風景が広がっていた—

(次は鴨志田穂高さんにバトンを託します)